「今日の説教、聴き手のために」　2013/7/28　明治学院教会（316）
（このプリントは毎週作っているものです）　牧師　岩井健作
「歴史の細部に働く神」　サムエル記上1 章19-28 節

1、母がみどり子を抱く姿は、美しいものの一つである。聖書の「神の救いの物語り」には「母と子を通して恵みをもたらす神」というパターンが幾つかある。旧約聖書の創世記、サラとイサク（創,21:1-8)の話。モーセとその母（出、2:4-10）の記録。ハンナとサムエル（サ上、1:12f)の物語り。マリアとイエス（ル1:26f)の出来事。今日はサムエルの物語りから、歴史の細部に働き給う神の物語を学びたい。
2、イスラエル民族のカナン定住生活と圧倒的強さを誇るペリシテ人の侵入。旧約師士記(15:11）には「ペリシテ人がわれわれの支配者であることをお前は知らないのか」とある。「イスラエルにはどこにも鍛冶屋がなかった。ヘブライ人に剣や槍を作らせてはいけないと、ペリシテ人は考えたからである」。イスラエルの危機を感じられる。
3、埋み火のようなヤハゥエの宗教。軍事力・経済力と契約の宗教との価値観の衝突。これは、現代の価値観「お金」（原発）か「いのち」（子ども）の激突に似ている。
4、サムエル記上下、列王記上下、歴代史上下という旧約の歴史書は、ペリシテ人との対抗の意味を思考する歴史家が、イスラエルの歴史に対する、反省や励ましを込めて書いたもの。歴史家は、一人の母の信仰の物語りをもって書きはじめる。
5、サムエル記上一章一節。「エフライムの山地に・・・・一人の男がいた。名はエルカナといい、・・・・」。2節「エルカナには二人の妻があった。一人はハンナ、もう一人はペニナで、ペニナには子どもがあったが、ハンナには子どもがなかった」。家庭内悲劇の内包。ペニナはハンナを苦しめる。6節。「ハンナを敵と見るペニナ」。夫エルカナの優しさ（8節）を越える問題。ハンナは神殿の聖所に逃れ、子を授かりたいとの必死の祈りをする。もし、子が与えられるならば、その子を神ヤハウェに捧げ、神のためのナジル人にするというもの。ナジル人とは神殿に仕える人。祭司エリへの訴え「苦しい事が多くある」(16 節）。
6、祈りは聴かれ、サムエルが与えられる。3年そばに置いての子育て。サムエルは母の祈りに全生涯が影響されている人物として、イスラエルの歴史に登場。彼女の祈りの動機は極めて人間的。しかし、それを含めて神は彼女を歴史の節目で用いられた。
7、ローマ帝国の片隅の事件としてのイエスの出来事との類比を覚える。
8、四十年余り前、日本基督教団は、若者達の鋭い問題提起に見舞われた。これを「紛争」といって教会主流はマイナスにしか評価しない。しかし、そこから随分現代に生きる宗教としての大切なものを得る事ができた、と私は思っている。その問題提起をした一人の牧師の、信仰の道への始まりには母と子の物語があった。
9、神は歴史の細部に働き給う。私たちは、自分ではこんな小さな事と思いがちだが、一つ一つの日常の小事を大切にして信仰生活を送りたいと思う。神は、その細部をお用いになって、神の御業を成し遂げられる。